女性医師エッセイ

女性医師活躍におけるレジリエンス

小野田医師会　　戒能　美雪

20XX 年 8 月 8 日 東京。快晴の午後、JR 駒込駅へ到着する。目的地は女子聖学院中学校高等学校。建学の精神は「神を仰ぎ人に仕う　Love God and Serve His People」である。この精神を土台として、緑多い環境で生活と学びが展開されている。ここで開催されているのは、全国中学・高校ディベート選手権、いわゆる「ディベート甲子園」である。玄関ホールに足を踏み入れた瞬間に、ものすごい熱気を感じる。これは間違いなく若者たちの熱気だ。彼らの緊張感や秘めたパワーが伝わってくる。その年の春、高校に進学した次男はディベートチームに召集された。リーダーは 2 年生女子、頭脳明晰で中学でのディベート経験もある。他校のように正式な部活動として臨んだ訳ではないが、国語教師の熱血指導のお蔭で、予選を勝ち抜き中国・四国地区代表となり、全国大会に参加することとなった。競技ディベートは与えられた論題に対して、肯定側・否定側に分かれて議論を戦わせる。高校の部の論題は「日本は裁判員制度を廃止すべきである。是か非か」。試合は「メリット・デメリット比較方式」で行われ、肯定側立論 6 分、否定側質疑 3 分、否定側立論 6 分、肯定側質疑 3 分、否定側第 1 反駁 4 分、肯定側第 1 反駁 4 分、否定側第 2 反駁 4 分、肯定側第 2 反駁 4 分という流れである。詳しくは「ディベート甲子園」のルールを参照頂きたいが、学校によっては 2 名の女子のみで参加しているチームもあり驚いた。選手達は事前にテーマに関する多くの文献や書籍に当たり、データ収集を行い、それらを分析し、理論を組み立て、そして立論・反駁のトレーニングを経て試合に臨んでいる。自身の意見と切り離して議論を行うことで、物事をさまざまな角度から考えることにより、より深い思考を展開できる力が養えるという。中立な立場にある審判をいかに説得するか、より妥当で説得力のある議論を考えなければならない。熱い議論が繰り広げられ、多くの試合が接戦とみられるが、最終的にはジャッジにより判定がなされる。次男のチームは予選リーグ 6 組で 2 位となり、決勝トーナメントへ駒を進めたが、残念ながらW大学高等学院に敗れた。主催者である読売新聞東京本社 河田卓司氏は「価値観は多様化し、国際情勢は複雑化する中で、ディベートによって培われる『論理的思考』や『自分の意見を的確に表現する力』を持つ人材がますます必要とされています。（中略）この大会の目的である『議論の文化』をさらに大きく育てていくことこそ、日本の将来を切り拓く活力につながると、改めて感じています。」と述べている。高校生による熱戦を目の当たりにし、議論に挑む姿勢の大切さを再認識した。そして、彼らの瞳の輝きを素直にうらやましく思った。

2016 年、米大統領選で大方の予想を覆してドナルド・トランプ氏が勝利した。落選したヒラリー・クリントン氏は敗北宣言の中で、少女たちに向け「みなさんには価値と力があり、夢を追い求めて実現するための、あらゆる機会を手にするにふさわしい存在であることを疑わないで。」と呼びかけたという。彼女の敗因については多くの

要素が述べられているが、そのうち「女嫌い」もキーワードの一つであった。「次の世代の女性のために苦労して切り開いてきたことが、女性からも若者からもさほど重視されていない。」との評価がある（2016 年 11 月 19 日 毎日新聞）。日本でも「女性活躍推進」という言葉は多くの場面で飛び交っているが、女性は真の良きリーダーとなり得るのであろうか。2016 年 5 ～ 6 月に「アイデム 人と仕事研究所が」一般の女性労働者 1671 名と企業 1428 社を対象として、女性活躍に関する web アンケート調査を行っている（「平成 28 年度版パートタイマー白書」2016 年 9 月 7 日）。「女性が意欲を持って働き続けるために必要なこと」は、女性労働者での第 1 位は夫や家族の理解・協力（47.0%）であった。一方、企業側の第 1 位は女性自身の意識改革（40.2%）であり、両者の認識が異なることが明らかとなった。また、女性管理職比率は「10% 未満」が 49.7% と最多で、女性管理職が少ない理由の第 1 位は「女性本人が希望しない」（43.3%）であった。背景には様々な因子があるが、若い世代ではやはり育児の負担が大きいと思われる。同様に、女性医師においてもリーダーとなることを希望しないケースは一定の割合で存在すると思われる。当県では先輩医師、山口県医師会、山口大学医学部、山口県健康福祉部、各病院等の御尽力により、この十数年の間に女性医師が勤務を継続するためのサポート体制や勤務環境の整備は着実に進んだ。おそらく離職者は減ったであろう。一方で、現在でも個々の能力が最大限に発揮されているとは言えないのではないだろうか。日本医師会では、女性医師支援に基本的に必要なこととして、「医師全体の勤務環境の改善」「指導的立場、意志決定機関への女性の参画」を提示している。これらを実現するためには、全ての女性医師において切れ目のないキャリア継続が望まれる。特に勤務医においては複数主治医制の整備が必要で、そのためには医師確保が不可欠であり、地方では医師と病院機能の集約化を考慮すべきであろう。また女性のみならず、全ての医師の意識改革が必要である。日本医師会 H26・27 年度男女共同参画委員会答申「輝く女性医師の活躍を実現するための医師会の役割」において、2 つの具体案として「イクボスの育成―イクボス大賞創設―」「育児休暇の両親間分割取得」が提案された。特に後者には異論を唱える方もいるかも知れない。この答申の中では「男性も長い一生のなかで、サバティカル期間として、また子供と向き合う時間を持つことは、その後の生き方を考える上で大きな意義がある。」と解説されている。（注：サバティカル [Sabbatical] とは、本来使途に制限がない職務をはなれた長期休暇をいう。）

レジリエンス（Resilience）という概念がある。「精神的回復力」「復元力」「折れない心」であり、「脆弱性」の反対の概念とされる。一般的には「（困難に）負けない」という意味であるが、精神医学・心理学ではストレスや逆境に直面したとき、それに対応し克服していく能力を言う。レジリエンスには思考の柔軟性が必要である。逆境でもポジティブな面を見い出すことが出来る人が、その局面を乗り越える事ができる。レジリエンスの構成要素として Anticipating：出現する脅威の予見、Monitoring：出現する恐れのある脅威の監視、Responding：出現した脅威への対処、Learning：一連の対応からの学びが挙げられている。心が折れないために、状況に一喜一憂せず感情をコントロールする力や、自己の力を過少評価しない自尊感情、自己効力感（効力期待や自信）、楽観性、そして人間関係が重要視される。若手の女性医師には各ライフステージでレジリエンスを発揮し、しなやかにキャリアを継続してほしい。そして議論や方針決定の場に参加すること、それが未来の医療へつながっていくと信じたい。